

<研究ノート>マルクス主義記号論のためのノート

著者	中野 収
雑誌名	社会労働研究
巻	16
ページ	175-197
発行年	1963-08-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017602

《研究ノート》

マルクス主義記号論のためのノート⁽¹⁾

中 野 収

〔I〕 かつて鶴見俊輔氏は「マルクス主義のコミュニケーション・シヨン」という題名の下に、マルクス主義の諸文献をコミュニケーション論の立場で読みなおし、極めて独自の見解を表明された事がある。マルクス主義という思想的・学問的立場と、コミュニケーションという特に、分析哲学、プラグマチズム系統の諸科学の基本概念が、論理整合的に連結しうるかどうかは後にふれるとして、鶴見氏が、かかる試みを行った前提には、「言語、思想、論理の問題の多くは、これを記号ならびにコミュニケーションの問題として考えることによつて、ときほぐしてゆくことができる」⁽²⁾。そして「プラトンやアリストテレスの体系の中に、古典的なコミュニケーション論が既にある。哲学史は、コミュニケーション観の変遷の歴史として、とらえなおすことができる。マルクス主義の中にも、独自のコミュニケーション論があつて、それがマルクス主義

によつては比較的、援用されることがすくなくままに今日まで来ている」という判断があつたことであつた。たとえば、所謂『意味論』が、モリスやカルナップの⁽⁴⁾いうように、言語・記号等に関する研究を、それらを使用する人間、あるいは、それらの指示する対象、それらの意味するものとの関連に於いて行ふものであるならば、たしかに、言語・思想・論理の問題から、一般的な人間のコミュニケーション活動の論理をも明白にしうるものであるだろう。その事の当否はここでは問わないことにする。更にまた、マルクス主義が、総合的な思想体系であるならば、当然のことながら『意味論』の課題とした分野に於いて一定の理論的追求を行つてゐることも事実だろう。これ又、事の当否はともかくとして、そこから、ある種のコミュニケーション理論乃至はコミュニケーション観を読みとることもあながち不可能なこととはいえない

い。氏の論文はこの意味で、マルクス主義にとって、その発展にとって一定の貢献をしていることは事実である。勿論この場合、コミュニケーションなる概念が、現状での科学的考究に於いて有効性をもつという証明が成されていなければならぬ。あるいは、現時点に於いて、コミュニケーション状況なり、コミュニケーション活動なりが、一定の独自の意味を持つことが証明されねばならない。『意味論』の持つ諸成果が、弁証法的論理学に対してどのような意味を持つかということが判明していてもよいだろう。以上の諸点に関してはマルクス主義の側でも、非マルクス主義の立場に立つ人々の間にも、それぞれ明確な規定が提出されているわけではない。しかし、例えば、鶴見氏が問題の多い、「ドイツ・イデオロギー」について従来、あまり見られなかった大変ユニークな読みこみの仕方を提出した意味はある。そして、それは「ドイツ・イデオロギー」に限らないのである。

以上のように、氏の論文は、マルクス主義に対してかなり重要な示唆を与えてくれているが、他方、二・三点の疑問がないわけではない。即ち、氏は、コミュニケーションの概念を非常に広く定義し、凡そ「記号」の介在する全ての諸現象を含むものと考える。つまり、思想・言語・論理等、『意味論』『コミュニケーション論』等が主要な課題とした領域から、所謂、精神的生産・精神的交通・認識作用（マルクス主義の場合反映論）に及ぶ人間の精神的（場合によっては肉体

的）諸活動一般を含むものとしている。所で、記号に関する諸現象という意味ではなく、コミュニケーション活動と、所謂、記号論理学の間には、本質的に異った原理が当然予想される。勿論、『意味論』が一定の学問的な有効性を持ったことは、このような、ある意味で全く異った領域をも単一の理論によって体系化した所にあつたといえよう。鶴見氏はしたがって、マルクス主義の古典をこの二つの方向から見ている。例えば「ドイツ・イデオロギー」はコミュニケーション論として、「資本論」は認識の基礎論として、といった風にある。このように、マルクス主義の学説を、全体として『意味論』的方向でよむ、つまり、個々の論文をそれぞれ異った方向から読むのではなく、意味論の課題とした点をも含むものとして考察の対象とすることが出来はしまいかという疑問が第一にある。

第二の疑問は、氏の使う「コミュニケーション」というコトバの意味のあいまいさである。あるいは多義性である。(5)氏は時には、ある実体を指示するものとして、また、論理学の外延を構成する要因として、諸個人を結びつける過程を指示するものとして等々、常に一義的な意味を持つものとはとれない使い方をする。云う迄もなく先に指摘した通り、氏の場合、コミュニケーションは極めて包括的な内容を持っているのだけれど、その時々で、特定の限定をうけたものとしてしか考えられない使い方をしている。

第三には、マルクス主義の学説・思想体系を、コミュニケーション論として読むということに対する基本的な疑問である⁽⁵⁾。氏は、おそらく、マルクス主義の体系を、一つのコミュニケーション論の体系として規定している⁽⁶⁾のであろう。したがって、全体系をコミュニケーション論の体系として構築しなおすことで論理学に抽象し、その論理学と、記号論・意味論との連結をはかろうというのが氏の意図であるようだ。問題は、果してかかる読み方が妥当かどうかということなのだが、むしろマルクス主義の体系の中から、当然内包されている、論理学と認識論を記号論・意味論によって媒介し、コミュニケーション論を構築するという方向が正当であるし、また有効なのではなからうか。

氏の労作に対する疑問は以上の通りであるが、以下のノートは、かかる疑問を前提にした上での筆者なりのマルクス主義記号論（コミュニケーション論と重なる所がある。）の試みである。マルクス主義の体系を『意味論』的な視点から見なおすという仕事は、現状で一定の意味を持つように思われる。つまり、中核に論理学・認識論を持ち、その外延に精神的交通論をすえた「ドイツ・イデオロギー」の中の難解な諸テーゼは、マルクス主義とコミュニケーション論、弁証法的論理学と『意味論』の現状でのより生産的な、新しい関係を考へて行く場合に大変示唆的であると考えられるのである。このような形での問題の追求の仕方をとるとすると、さし当

マルクス主義記号論のためのノート

て考慮されねばならない、いくつかの文献のあることに気付く。以下では、かかる追求の仕方によって二・三の論文から注目すべき部分を摘記し、その意味を考えてみることにする。

〔Ⅱ〕最近、ソヴェットの哲学関係の文献の中に形式論理学などに関する論文が増加していることが指摘されている。同時にこのことに関連して「記号」に関する論文も増加している⁽⁷⁾と考えられる。現在のソヴェットに於ける記号論が如何なる視角からとり上げられているかを考えてみるために多少長い引用ではあるが、次にあげてみる。

現実の認識と人びとのあいだの交際の過程における記号の役割についての問題は、巨大な理論的ならびに実践的意義をもっている。……記号体系の一般的理論をしあげること

は、専門の科学——記号論——の対象となった。数学的論理学、サイバネティクス、オートメーション化、遠隔操縦技術の成功裡に行なわれた発展と結びついて、記号体系の研究において顕著な進歩がなしとげられた。……記号の問題は人間の反映活動とコミュニケーション活動の手段についてのより一般的な問題に直接の関係をもっており、このゆえに、哲学的見地からしてきわめて重要だからである⁽⁸⁾。（傍点引用者）

以上の如く、ブルジョア記号論の一定の発展段階を前提にしているという事情もあってその問題意識の相違は当然あるにしても、理論としてはまさにモリスのそれと異った所はな

いのである。所で、マルクス主義の記号論の思想的系譜は、傍点のつけてある諸分野での理論的成果によって跡づけることが出来る。即ち、第一に、認語過程に於ける記号の意味、第二にコミュニケーション活動に於ける記号の機能、第三には、部分的にはあるが大脳生理学・条件反射学における信号理論、等々の領域での理論的検討の結果等々において、ある程度、たどることが出来ると考えられる。この中で、特に注目すべきものとして、スターリンの言語学に関する論文がある。この論文の意義の検討は後に行う予定であるが現在の記号論への注目を予想させる諸点を含んでいることを指摘しておきたい。ここに引用した論文が、どの程度妥当であるかを別とすれば、この限りでもマルクス主義の立場では、記号は、最初から社会的な存在として追求され、特定の学問領域に於ける記号論が問題ではなく、まさに「人間と社会にとって記号は如何なる意味を持つか。」(モリス)と問が行なわれていると考えて差支えないようである。このような記号に対する考え方が、最近のブルジョア科学に於ける記号論の成果を考慮して現在みるような新しい記号論の構想になったのであろう。ブルジョア記号論は一定の成果に達してコミュニケーション理論と接点を持つようになったのに対して、マルクス主義記号論とマルクス主義コミュニケーション論は、相互に含み合う形で、理論形成が行なわれて来たといつて過言でないと思われる。

さて、記号論は二重の課題を負っていた。(9) 少くともブルジョア記号論は、結果的には、コミュニケーション論となることでそうであった。つまり、第一に、ブルジョア諸科学の統一理論としての、換言すれば、方法論としての記号論であり、第二には、認語過程、コミュニケーション過程の構造の分析理論の一部としての記号論であった。この一見して異った課題に共に答えうるものこそ記号論であるとすれば、現在ソヴェットで行なわれ始めた記号論はまず第一の課題に答えるべき記号論である。つまり、弁証法的論理学・認識論との新しい関係を持つ記号論である。そしてマルクス主義の場合第二の課題に対応する記号論は正確な意味での記号論としては存在しているわけではなく、記号論の前史を形成していると考えられるのである。そこでまずはじめに二・三のマルクス主義の文献に当りながら、その前史をたどってみよう。

(Ⅲ) 精神的交通。マルクスは「言語は思考の物質的基礎」であるといった。彼は、言語がかかる本質を持つということに対して一定の現実的な基礎を規定している。そのことの意味を「ドイツ・イデオロギー」の中で部分的にはあるがふれている。それを略述してみれば次の通りである。

彼は、人間史(＝社会)にとっての一義的な前提は、諸個人が存在であるとし、この諸個人を諸個人たらしめるものは、彼らが自らの生活手段を生産することであると考える。

そして、諸個人が如何なる個人であるかは、彼らが何を、如何にして生産しているかによって決定される。「諸個人が彼等の生活を表現する仕方（＝生活様式）は、とりも直さず彼等が存在する仕方である。従って彼等が何であるかは、彼等の生産、即ち彼等が何を生産するか、並びに彼等が如何に生産するか、ということと合致する。従って諸個人が何であるかは、彼らの生産の物質的諸条件に依存する。」⁽¹⁰⁾マルクスは生産というカテゴリーをとって、それこそが諸個人を諸個人たらしめるものとしたが、しかし、生産はそれ自体としてただあるというのではない。それは副次的な人間の諸活動と実は密接な関係の下にある。「この生産は人口の増加と共に始めて現われる。人口の増加はそれ自身また個人相互間の交通を前提する。この交通の形態はさらに生産によって制約されている。」⁽¹¹⁾つまり、人間史に於ける主要な要因は生産であるが、この外に副次的な諸要因を否定し得ないし、それらは又生産をも規定しているというのである。そこで我々としては、まずマルクスが『個人相互間の交通』といったものが如何なる事実を意味しているのかを考えて見なければなるまい。

最初に注意しなければならないことは、この場合の交通なる概念は、『諸個人相互間の』のという限定がついてはいるものの形式社会学に於ける「相互作用」や、現在いわれている「コミュニケーション」などというコトバの意味内容とも異っていることである。例えばマルクスの「貨幣の成

立とともに、すべての交通形態及び交通そのものは各個人にとっては偶然的なものとなる。」⁽¹²⁾「個人——その諸力が生産諸力であるところの——は分裂し、対立して存在しているにも拘らず個人の諸力は交通及び聯関のうちに於てしか現実的な力にならない。」⁽¹³⁾からしてみれば、一定の生産力の発展段階に対応している、あるいはそれを前提として存在する諸個人の諸関係の形態か、あるいはその総体としての構造に対して「交通形態」とか「交通そのもの」という概念を用いたことがわかる。そしてこのことから直ちに規定されるのは、「経済学批判」に於ける『生産関係』という概念だろう。所が、彼がドイツ・イデオロギーの中で使用した『交通』『交通形態』なる概念の中には『生産関係』なる概念の中には収容しえないある何かがあるように思われる。無論それらが客観的な生産諸力の一定の発展段階から独立しているという意味ではない。

そこで『交通』なる概念の残余の部分というのは何か。彼が「個人相互間の交通」という概念を提出した後で、人間の表象作用、思维作用と同一のコロラリーに並ぶものとして『精神的交通』なる概念を使っていることから何らかの規定が可能になるのではあるまいか。「各種の理念、表象、意識の生産は、先づ第一に、人間の物質的活動及び现实生活の言葉たる物質的交通の内に直接織りこまれている。人間の表象作用・思维作用・精神的交通は、ここではなほ、彼等の物質的行動の直接的な流出として現はれる。一般に或る民族の政

治・法律・道德・宗教・形而上学・等々の言葉のうちに見られるところの精神的生産についても、同一なことがいえる。

人間は彼等の諸表象、諸理念、等々の生産者である。但しここにいう人間とは、彼等の生産諸力とこれらに照応する交通（その最高の諸形態に至るまでの）との一定の発展によって制約されているところの、現実的な行動しつつある人間のことなのである。⁽¹⁴⁾この引用文の真意は、意識の成立は、一定の物質的基礎を前提とするということなのだ但同时に我々は別のことに注目したい。つまりそれは「交通」なる概念が、「物質的交通」と「精神的交通」の二つの概念に分離されたことである。「交通」とは、あく迄も「個人相互間の交通」⁽¹⁵⁾であり、生産の出現の前提となり、逆に又、生産に制約されている以上、当然、『生産関係』以外という多少語弊があるにしても『生産関係』に制約されながらも、尚、その前提となるべき「精神的交通」をも含意しなければならない。所で、かかる全体的な構成の中に位置づけられた「精神的交通」という形態の中で諸個人は何を交換するか、換言すれば交通形態の中で諸個人は如何なる関係にあるか。

「精神的交通」は、表象作用・思维作用のコロラリーの中にあるということの意味は、この関係を媒介するものが「表象されたもの」「思维されたもの」であるということにならないだろうか。では「表現されたもの」「思维されたもの」とは何か。あるいは、それは如何なる規定性を持つか。

マルクスは、人間の生産諸力を飛躍的に増大させた分業の性格を叙述し、その結論の部分で次のようにいう。「分業は、物質的労働と、精神的労働との分化が出現する瞬間から、初めて現実的に分業となる。この瞬間から意識は、自分を現実の実践の意識以外の何物かであるかの如く想像し、又何ら現実的なものを表象することなしに而も現実は何物かを表象しているかの如く実際に想像し得る。——この瞬間から意識は、自分を世界から解放して『純粹』理論・神学・哲学・道德・等々の構成へ移行行くことが可能となる。」そして「生産力・社会状態及び意識が、互いに矛盾に陥ったり、また陥らざるを得なかったりするの、分業の出現に伴って精神的労働と物質的労働とが（享樂と労働とが、生産と消費とが）別々の個人に帰属するという可能性、否、現実性が与えられたからである」⁽¹⁶⁾。意識は、意識された存在以外の何ものでもあり得ないのに、自らを世界から解放して現れる。しかし、マルクスは、更にいう。我々が、現実の生活過程の中にある諸個人から出発し、「意識を彼等の意識としてのみ觀察」することに依って、「人間の頭脳中に於ける各種の仮想的形成物も亦、彼等の物質的な、經驗的に確かめられ得る、且つ物質的諸前提に結びつけられている昇華物なのであり、」⁽¹⁷⁾「道德・宗教・形而上学その他のイデオロギー、並びにこれらに照応する諸々の意識形態は、もはや独立性の外観を保持しない。」ことが明かになると主張する。

マルクスにとっての課題は、飛翔する「意識」を地上に連れもどすことにあった。そして現実的な諸個人から出発することに依ってこのことは可能であったのだ。しかし、我々の課題は「意識」が飛翔しうることを意味を再度問うことにあるだろう。地上にある「意識」はもはや本来の「意識」ではない。マルクスが、精神的生産といい、精神的交通といい、そこに意識を介在させたことの意味も又、そこにある。かかるものの交通としての精神的交通の意味をマルクスは「言語」論という形で提出する。その主要な部分は次の通りである。「『精神』は元来、物質に『憑かれ』ておるといふ呪はれたる運命を担っている。現に今、物質は、運動する空気層として、音という形をとって、要するに言語の形をとって現われる。言語は意識とその起源の時を同じうする。——言語とは他人にとっても、私自身にとっても存在するところの実践的な現実的な意識であり、また、意識と同じく、他人との交通の欲望及び必要から発生したものである。」⁽¹⁷⁾ここでまず注目しなければならない点は、精神的交通の必要性から、より正確に言えば、諸個人相互の交通の必要性から意識と言語は、同時に発生したということである。つまり、意識は生活過程の中にある諸個人の意識としてあるが、更に、諸個人間の相互の交通形態の中から必然的に発生してくるといふ二重の規定をうけているのである。意識は、物質に憑かれているという呪いと共に、意識の自立的な側面も又あるということ

なのだ。かかる意識（意識の実践的・現実的な形としての言語）の運動形態として、精神的交通はかかるものとして始めて生産の前提たる諸個人相互の交通の不可欠の要因となる。

さて、先の引用文には、注目すべき第二点として次のような指摘がある。即ち「言語」の持つ基本的な属性に言及しているのであるが、まず「言語」とは、一つの物質的な過程であるという。意識は「言語」といふ形をとって外在化する。この点では、「記号」は、一定の意味が物理現象に乗ることによって成立すると思えたモリスの考えと酷似している。ただマルクスの場合は、その前提として具体的な生活過程・具体的な人間の行動を前提とし、交通の欲望と必要を条件とした。モリスは、一定の「記号」に反応する有機体を想定した。この違いは大きい。何となれば、マルクスにとっては、「言語」とは他人にとっても私自身にとっても存在するものであるなければならないのに対して、モリスには「記号」と、それに対応する孤立した有機体があるばかりであるからだ。

マルクスは、ドイツ・イデオロギーの中でユニークな『交通』なるカテゴリーを提出し、人間活動の歴史的意義と、その論理を究明しようと試みた。勿論、ドイツ・イデオロギーの主要な課題が、「精神的交通」論にあるわけではない。ただ、『交通』なる概念と、その系に並ぶ一連の諸概念を再構成することによってモリスの「社会と個人にとって記号は如何なる意味を持つか」という問に完全に答えうると思われ

る。そして何よりも先づ、モリスが見落した（あるいは故意に無原則的に拾象した）「記号過程」の基本構造の重大な側面が強調されねばならなくなるであろう。このことは結局、マルクスが「記号論」乃至は「言語論」を主要なテーマとするのではなく、人間の総体的な諸活動の解明から、必然的に「言語」にも言及せざるを得なかったということからして当然なことであつた。しかし「記号論」が仮に、先にあげた二つの課題を負うものとすれば、マルクスの如き「言語」への注目は不可欠であろう。勿論、マルクスには「記号論」のもう一つの課題に対する顧慮は全くない。当然のことながら、方法論＝論理学としての「記号論」はマルクスにとっては無縁であつた。

〔Ⅳ〕労働と言語。マルクスは、『交通』に対する欲望と要求の中から意識と共に言語が発生したとした。では果して如何なる経緯をたどって言語が生れて来たか。つまり、人間が人間であるための主要な要因としての生産＝労働の過程の中から、その持つ論理からコトバが生れ、コミュニケーション過程が成立した事情を解明したのはエンゲルスであつた。「自然弁証法」《猿が人間になるにあたって労働がはたした役割》では、進化論の立場に立って明確な説明が成されている。その論理をたどってみよう。

直立歩行によって手が身体の移動から解放されると新しい機能を持ちうるようになる。手が複雑な機能を持つことと、

肉体の他の部分、特に脳の変化とは相互的な因果関係がある。手の機能は外界に対する働きかけであり、それは労働ということだ。新しい労働は更に新しい手の機能の獲得の条件となる。「手は労働のオルガンであるばかりではない。それはまた労働の生産物でもある。」⁽¹⁸⁾身体各部分の進化と、労働の過程の複雑化と、群居性という条件から、偶発的な相互扶助や協力が行なわれる。そして「この協力が各個人にとって有用であることについての意識を明かにすることに依つて、必然的に社会成員を相互にちかずけるのに貢献した。要するに、生成しつつある人間は、たがいになにかいなければならぬ所まできた。」⁽¹⁹⁾かかる要求は必然的に音節に分れた字母を発声させる器官の進化をもたらし。そればかりではない。このような発声は当然、他の主体に受容されねばならないから、聴覚器官の進化と、それを理解する認識能力の進化を促す。こうして、労働という肉体的な能力と、それを統率する大脳の働き、またコトバを発しそれを受けとって理解する感覚的・理性的能力の拡大の要請は、一定の認識能力、抽象能力、推理力の発達を促し、これが逆に、労働と言語に反作用を及ぼすという循環が形成され、こうして、群居生活が「完全な人間の登場」である社会に転化することによってこの循環は完成する。

しかし、この進化の論理の中には、進化を逆にする要因が潜在していた。エンゲルスは云う。「労働そのものも、代を

かさねるごとに、べつの、いっそう完全な、いっそう多面的なものになった。……商業や工業とならんでついに芸術や科学があらわれ、……法律や政治も発達し、それとともに人間の頭脳中での人間生活の空想的映像——宗教も発達した。はじめ頭脳の産物としてあらわれ、人間社会を支配するかに見えたこれら全ての被造物のまえに、労働する手のささやかな産物は背後にしりぞいた。そして、労働を計画する頭脳が社会のごく初期の発展段階においてすらすでに（たとえば簡単な家族内においてすでに）計画された労働を彼の手以外の手をして遂行させるに至るや、この傾向はますますつよくなった。急速にすすみつつある文明につくしたいっさいの功績は、頭脳、脳髓の発達および活動のせいにされた。人間は、彼らの行為をその欲望（そのさい欲望はたしかに頭脳に反映し意識にのぼる）からではなく、その思惟から説明することになれて来た。⁽²⁰⁾たしかに、人類の構築した文明は頭脳の産物であるかの如く見える。しかし、エンゲルスはそれすらがささやかな手の労働の無数の堆積によって初めて可能であると主張する。エンゲルスのこの説明の背後にある論理はまさに認識と交通の卓越した手段である言語と、人間の進化した頭脳の奇妙な相互作用、因果過程が文明の文字通り逆転した過程に現実性を与えたことを立証している。エンゲルスは、主要な課題として言語のかかる逆機能的本性に言及しているわけではないが、この本性の把握がない限り文化と文明の正当

な意味づけは不可能であるだろう。

このように、エンゲルスの論旨は平易であり、ありていに云えばマルクスの提出した課題の一部分に立入った程の意味を持つにすぎないともいえようが、しかし、ここでは一貫して、言語現象の社会的な意義が問われている。後にみるようにこれらの説明は現在のソヴェットの「記号論」にも反映されている。かくして「意味論」的領域は現代ブルジョア「記号論」の如く、数個の学問領域の課題がそこに焦点を結ぶのではなく、マルクス主義の思想体系の中にあつては一つの微細な焦点にすぎない。

当時の経験主義的記号論（レーニンのいえば経験象徴論）の中には、尖鋭なブルジョアの科学の論理学の形成という指向性もなく、それ自体としてはある種の進歩性をも持っていたという事情もあつて、反経験主義、反経験象徴論は主要なテーマたり得なかつた。経験主義（経験象徴論）批判が一つの主要なテーマになるのはレーニンの段階に至つてである。マルクス・エンゲルスの段階では、要するに、反対思想の中に「記号論」「言語論」の有力なものが存在せず、またそれらの論究が学問的、思想にもあるいはまた社会的、運動論的にも有効性をもたない等々の理由のために、全体系の中ではあまり大きなウエイトを占めていないことは事実である。とにかく、彼らの言語に対する極めて原理論的な言及は更めて確認しておく必要はあるだろう。

〔V〕 マッハ主義の批判。経験主義は、マッハ、アヴェナリウスの段階で一つの思想としての頂点に対する。つまり、学問的・思想的に一定の有効性を持つようになる。ほぼ三つの側面がある。第一は、経験批判論が一つの学問の方法論・論理学・認識論として主張されるようになったということ。

第二は、感覚という人間の生理過程(物理過程に環元も可能なのだが)に体系を一元化することに依ってある意味での唯物論的な要因を導入しながら唯物論を限定することに依って観念論化している。がにも拘らず、唯物論にある局面で接近することですぐれて反唯物論的、いや正確には一つのすぐれた唯物論批判の思想体系に自らを造りあげたということ。第三は、レーニンのいう経験象徴論の完成であって、これは感覚に二元化する論理的帰結として当然であるが、問題は「記号論」の二つの課題を統一する論理的根拠が造られた所にある。

レーニンは、経験批判論の評価の場合の四つの視点をまず(21)

すえる。第一に、この哲学の理論的基礎と弁証法的唯物論のそれとを比較すること。第二には、経験批判論が、現代に於ける他の哲学派の中で占める位置を規定しておくこと。第三は、自然科学の一派とのみマッハ主義が密接な関係を持っていることを確認すること。第四に、「経験批判論の認識論的スコラチックのかげには、哲学上に於ける諸党派の斗争——結局は現代社会の敵対的諸階級の傾向とイデオロギーを表現するこの斗争を認めざるを得ない。」こと。こう上げてみ

て明かなことは、当時の段階に於ける経験批判論の問題性の本質と所在を適確にとらえていることである。

周知の如く「唯物論と経験批判論」は前面に、当時のマッハ・アヴェナリウスのエピソードをすえ、それを通してマッハ・アヴェナリウスからイギリス経験主義を批判するという論理構成をもち、まず認識論的な批判をし、特に注目しなければならなかった自然科学との関係に論究をすすめ、最後に弁証法的唯物論との関係をのべている。以下では簡単にレーニンの経験象徴論の批判を中心にまとめをしてみる。

新しい思想体系の成立には、常に先行した一定の発展段階に達している自然科学の論理学、方法論が様々の形で介入している。特に現代の経験論の復活＝論理実証主義の成立には、自然科学の特定部分の導入が行なわれている。したがってこの思想体系の成立の一つの緒口となったマッハの場合もやはり事情は同様であって、これも又かなり体系化された自然科学観を持って登場する。あらためてことわるまでもなくマッハは自然科学者であって後に哲学的な思想を述べるようになったのである。そこで、レーニンにしたがって「経験一元論」といわれるマッハの経験批判論の紹介から始めよう。マッハは、科学の基本的な任務を次のように考えている。「一、表象間の連絡の法則を確かめること(心理学)。

二、感覚(知覚)間の連絡の法則を見出すこと(物理学)。

三、感覚と表象との間の連絡の法則を明かにすること(精神

的物理学)。「マッハがこのように、感覚(知覚)、表象の分析によって全ての学問領域の課題が満足されるといったことは、現在の分析哲学Ⅱ論理実証主義の祖たるに充分の資格があるというのだが、かかる主張の根拠は次のような思想の根源がその前提にあるからに外ならない。「感覚は『物の象徴』ではない。むしろ『物』が、相対的安定性のある感覚複合を表はす思想的象徴である。物(物体)ではなく、色、音、圧力、空間、時間(吾々が普通に感覚と呼ぶもの)が、世界の本来の要素である。⁽²⁴⁾物(物体)がかくの如く感覚及び感覚の複合ということになれば、物理学、総じて自然諸科学はある特殊な論理構造を持たねばならない。「吾々は、運動を起すものとしての力も感知(経験において認識する——*erfahren*)しなければ、いかなる運動の必然性も感知しない。専ら吾々の感知するものは、一つのものが他のものに継起する⁽²⁵⁾ということである。」そして「必然性は、結果継起が予期されるその確度たるにとどまる。」「論理的な必然性も、たとえば物理学的な必然性の如きも、存在しない。」「自然の中には原因もなければ結果もない。」「因果律のすべての形態は主観的な衝動から生ずるのであって、自然にとっては、そういう衝動に⁽²⁶⁾応ずべき必然性がない。」等々、これに類した内容のものをレーニンは非常に数多く引用している。レーニンもいうように、このような考え方は、不合理な結論に我々を連れて行きしかも窮極的には奇妙な不可知論に迷い込ませる。

外界と、その法則性は人間の認識の象徴であって、それ以前から法則性などはない。外界に法則性をもたらすのは吾々の理性である。だからして天体——地球・星・その運動の法則は人間が創ったものであるということになってしまいうだろう。さて、因果性なり、必然性が概念の世界のものであって、人間の外にある實在に属するものではないということから、それらは人間の頭脳の恣意的な創造物となり、一定の「函数関係」によって公式化しうようになる。つまり、先にあげたマッハの「感覚」なる要素は、「函数概念」に置換することが出来、「感覚の複合」Ⅱ「要素の相互関係」は函数関係によって表示しうようになる。いや、レーニン流にいえば、ある一定の条件の下で特定の「函数関係」によって表示しうるだけであって、ただ化学の一分野でそれが可能にすぎないのだ。しかし、問題は、物理現象、総じて我々にとって外的である全ての實在を「感覚の複合」とすることに依って、とにかく一定の「函数関係」によって数学的に表現しようという試みをした所にある。しかも、ここから一つの重大な帰結がもたらされる。というのは、全ての学問分野に於ける一定の成果Ⅱ命題は、ある記号Ⅱ象徴の体系としてしか存在しえなくなる。したがって函数関係は特定の象徴の体系として表示される。また、實在するものは感覚であり、それを含めた経験である以上、象徴は「経験象徴」以外のなにものでもなくなる。人間の認識とは、所詮は、かかる「経験象徴」の

体系化以外にはありえなくなる。このようにして、外界の認識は、経験象徴的になる。更にいえば、経験象徴自体が、所謂自然法則そのものになる。こうして、法則性、必然性の探求は、つまり論理学は、「経験象徴論」として完成される。勿論、レーニンの云う通り、決定的に重要な認識論上の問題は、因果的な連関の解明が正確で、しかもそれを数学的な公式によって表示しうるか否かという所にあるのではなく、かかる因果連関の認識の源泉が、自然の客観的な法則性にあるのか、それとも我々の感覚の能力にあるのかどうかという点にある。そこで、一体かかる「経験象徴論」とは如何なるものか、もう少しその内容に立入ってみる。

レーニンにとって「経験象徴論」は、「経験批判論」の一分岐としての存在でしかなかった。それが後に至って急進的なブルジョア諸科学の統一を指向する一つの論理学に迄構想されるとは予想しなかったのではあるまいか。各所で「経験象徴論」に少々ふれるが一項をもうけてその徹底的批判を試みてはいない。ただ一ヶ所、経験批判論者の後継者が、「経験象徴論」を行っていることに注目し、ヘルムホルツの象徴論批判という形で言及している所がある。レーニンによるとヘルムホルツは一定の思想的立場を一貫してとっていない傾向があるという意味で認識論的には不徹底であったということである。そのことを確認した上で象徴論の紹介を簡単にやってみよう。まず、その観念論的な叙述。「私は感覚を外的

現象の象徴として表号した、そして感覚に對しては、その表現する物事との類似をすべて拒否した。⁽²⁷⁾ また、「吾々の表象の真理を、実践上の真理の意味において以外に語るのは、何の意味もないと思う。事物についての吾々の組成する表象は、その客体を示す象徴、自然的に与えられた表号でしかあり得ないのであって、そういう表号を吾々は、自分の運動や行為の調節のために利用することを学ぶのである。これらの象徴を正しく読み取ることを学んだら、吾々はその助けをかりて自分の行為を、所期の結果を得るように仕向け得る力を具へる。」これは不可知論であり、主観論である。所が、これらの引用文の前後には、「吾々の観念なり表象なりは、吾々の観照し表象する対象が、吾々の神経系統なり吾々の意識なりに起す作用である。」とか「まづ第一に外的対象の特性はといえば、すべての右の対象に歸し得る特性は、対象が吾々の感覚か、もしくは他の自然的対象か、いづれかに及ぼす作用を、表号するにすぎないことは少し反省すれば分ることだ。」とかいう叙述がある。これらの文章で見る限りヘルムホルツは唯物論者である。ここで注意すべきことは、レーニンはヘルムホルツのこの思想の中に、つまり「象徴論」の中に唯物論的な要因とともに、観念論的な側面を看取し、その不徹底を批判するわけであるが、元来「象徴論」||「記号論」には、それらを構成した人々の認識論的見解の不徹底さもさることながら、その対象とする「象徴」||「記号」の持

つ特性のために唯物論的な側面と、観念論なそれとを併存させてしまう傾向がある。ヘルムホルツの「象徴論」も又、その例外ではない。まさにレーニンの批判は正しかったが、必ずしも、一九三〇年代以降に於けるブルジョア記号論の完成を阻止しうるものではなかったし、また後になってかかる思想的立場に近い人々による現代数学の理論の導入の意味を論理的に明かにし、且彼らが、そのことによって、理論的な有効性を持ったことの根拠を充分に説明しえないでいる。この点には後に再びふれねばならない。

レーニンはかかる混乱をもったヘルムホルツの象徴の説明を引用する。「吾々の感覚の性質が、この感覚を起す外的作用の特質如何を吾々に告げる限りは、感覚は外的作用の記号(Zeichen)とは見做され得るが、模像とは目されない。というのは、模像といへば、模写される対象と或る相似があることを要する。……ところが記号は、記号されるものと何の相似もあることを要しない。」⁽²⁸⁾とする。外界と、記号とそれらに連関している感覚の三者の相対的独自性を主張したこの叙述は現在の記号論のその萌芽を含んでいると考えられる。ある意味では「記号論」の基本的な原理を提出している。これに対して、レーニンは、エンゲルスの反映論の基本的な公式を前提にして、次のように批判する。「感覚は、物の像ではなく、物と『何の相似』もない記号もしくは象徴にすぎない」とすれば、ヘルムホルツの出発点となった唯物論的前提は

覆って、外的対象の存在に幾分の疑いが挟まれる。というのは、記号もしくは象徴は、仮想上の対象に対しても全然可能なことであって、しかも誰れでもそういう記号もしくは象徴の実例を知っている。⁽²⁹⁾かくして「経験象徴論」はカント的な不可知論の傾向を帯びてくる。模像は、まさに、現実とは異ったものである。かといって模像は、記号とか、象徴とかいわれるものとは別個のものである。象徴・記号は約束的なものだが、模像は、「模写」さるべき客観的实在を前提せずには存在しえない。所が、単なる約束的象徴・記号を前提としている認識論は不可知論に到達せざるを得ない、というのがレーニンの批判の要点である。

以上の如く、レーニンは、経験批判論の論理を追求する過程で必然的に導出されてくる「経験象徴論」の思想的根拠とその実体をも批判する。

本論文のレーニンの項の前半の、「経験象徴論」の形成の論理的根拠の部分は「経験批判論」の論理学・認識論・方法論のある部分であって、しかもレーニンは全く正当な批判を提出している。その正当である所以は、かかる思想体系が一九世紀の初頭という歴史的な時点で持つ意味から成されたものであり、その思想体系の観念性・反動性が批判されたということである。つまり唯物論者であることを主観的には主張するマッハのエピゴーネンに対する批判として当を得ていたことは事実であった。所が、かかる思想体系が主観的にも

反唯物論的立場の人々により信奉され、しかも限局された位置に於いてではあるが社会的に有効性を持つ学問領域の開拓や、従来のブルジョア科学の補強に奉仕するという面での批判の根拠（少くともレーニンの段階ではブルジョア科学が急進的な役割を果たすことは現実的ではなかったから）の提出には至っていない。少くとも後にふれる現在のソヴェットでの「記号論」形成の理論的根拠をここに求めることは出来ない。後半の部分は、「記号論」の第二の課題に相当するわけであってここでは「経験象徴」の所謂「記号」「象徴」なる概念の批判が行なわれる。批判の根拠は、マルクスの「言語」観であり、エンゲルスの反映論の公式である。少くとも、総体としての社会の諸過程で機能する「記号」「象徴」の本質をとらえた上での批判である。レーニンの批判にこれ以上のものを要求することは無理であろう。

つまり、レーニン段階での「記号論」は、勿論、ネガティブな性格しか持ち得ないのであるが、第一の課題を担う「記号論」はまさに弁証法的唯物論とは全く無縁な、反動的な思想であるという評価によって成立していたと考えてよからう。そして、第二の課題を負う記号論に対しては、「経験象徴論」の批判という実体を持ったものとしてあった。そして現在のソヴェットに於ける「記号論」の出現迄には、ある意味で象徴的なスターリンの「言語学」に関する論文の出現という画期的な契機が存在しているのである。

〔V〕 スターリンの言語学に関する論文。一九五〇年に発表されたスターリンの「言語学に於けるマルクス主義について」は、硬直した当時の上部構造論の批判をスターリンの権威を持つてしなければならなかった学問状況を物語っている。このような方法でしか硬直した状況を解放し得なかった所に、当時の学問状況の深い頹廃を見ることは可能だろう。したがって、かかる上部構造論の破綻を最も典型的に示していたマールの言語学が直接の批判の対象になったことも当然であった。この論文の持つ問題点を二、三あげてみよう。

第一に注目すべき問題は、右に述べた事からも明かなようにこの論文は、新しい言語理論の原理と共に、併せて従来の上部構造論の修正を行っていることである。つまり、従来の理論に於ける上部構造の土台に対する働きかけを強調し、その能動的役割をまず指摘する。かかる上部構造の自立性の強調の後で「言語」がこの上部構造とも異っている事を示している。⁽³⁰⁾ 注目すべきは、まさしく従来の上部構造論のままで「言語理論」だけの修正はある程度可能であるのだが、併せて上部構造論の修正をも提出している所である。

第二には、果して言語とは如何なる意味で上部構造と異っているかという点である。(1)、言語は、種々な土台によって生み出されたものであって、社会の全ての階級に奉仕し、その要求を満たす。人間の交通の手段としてこの意味で常に特定の土台にのみ奉仕する特定の上部構造には所属しない。

(2)それ故に言語は、土台とも、上部構造とも異って長い間殆ど変化せずに生き残る。唯一の変化はヴォキャブラリーの増加である。(3)言語は直接に生産活動と結合されている。生産から土台、土台から上部構造にわたる全人間的活動に結びついている。したがって人間的活動の特定の変化は、土台の變化をもたらしことなしに直ちに言語構造の變化をもたらし⁽³¹⁾。

以上の点で上部構造とも、土台とも、生産とも直結していながら、相対的に独自の存在であることが強調される。とすればここに非常に重要な疑問が必然的に生じてくる。従来マルクス主義では、生産・土台・上部構造という概念によって人間の全活動を包摂して来た。でここでこれらの各活動分野のいずれとも連関する言語活動なる一定の領域が仮に設定されたとしたら、従来の体系は如何なる修正をうけるべきなのだろうかという疑問である。スターリンはこの点には直接は言及していない。かかる独自の領域の設定は、文化的な活動という特定の活動領域の問題性を必然的に惹起すはずであろう。文化的活動とはオーバー・ラップはしているが人間のコミュニケーション活動の独自の性格の問題も直ちにこれに関連して起ってくる⁽³²⁾。

第三に、注目すべき事柄は、言語とは一体なにかという問題であろう。スターリンは言語の特徴を次のように述べている。「言語」はまず社会と共にある。言語現象は社会現象である。更に、言語はかかるものとして手段であり用具であ

る。つまり、言語によって人々は「交通し、思想を交換し、相互の理解に達するのである。」言語がかかる交通の手段であるためには「思惟と直接にむすびつき、人間の思惟活動の結果や認識活動の成果を単語や文中の単語の組合せのうちに記録し、定着させ⁽³³⁾」ねばならない。逆にいえば、「言語」は社会を構成する主要な要因であって、言語なしには社会は成立しない。この意味で言語は社会の斗争と発展の用具である。次に言語は豊富な単語を持ち、一定の文法の規則によって人間の思想に物質的な言語という外被をさせる。それ故に、文法は人間の思惟の抽象活動の成果であり、過去の精神的な営為を一体化している。したがって文法を始めとする言語の構成は、人間の思惟活動の発展と共に変化し、豊富化される。勿論、この思惟活動は抽象的な思惟の世界に限定されない。言語は生産の発展、社会の体制の変革、技術の進歩、交換過程の変化により重大な変容を促がされている。が言語が、全ての人間活動から相対的に独自であることは、急激な変革のないことを示している。スターリンは、社会現象としての言語現象を正當にここに表出している。ここで述べられているのは「言語」に関する社会学であり、民族学である。ある意味ではいかなる思想的な立場に立とうと、このようなパースペクティヴは必要不可欠である。所で「言語」社会学は、必然的にある種のコミュニケーション論を含まざるを得ないであろう。したがってその意味では、マルクス「ドイ

ツ・イデオロギー」エンゲルス「自然弁証法」の理論的成果に接続するものである。勿論、「記号論」に於けるが如き、「言語」||「記号」の基本構造には全くふれていないが「記号」||「言語」が社会的には如何なる機能を果し、またいかなる独自の論理を持つかを明かにしている。この理論は全く序論でしかないのだが、この論理の延長には「記号とコミュニケーション過程」という現在の「記号」の課題が存在するはずである。

さて、すでにスターリンの段階では、「現代ブルジョア記号論」の存在と、その一定の有効性は無視し得なかったはずである。そこで、第四の問題点は、ブルジョア記号論を如何に評価するかという問題である。マルクス・エンゲルスは言語を「思想の直接的現実性」といい、また「実践的・現実的意識」と定義したが、そこで言語学は言語の意義的側面、即ち、意味論・歴史の意味論・文体論をどう扱うか、という質問に答えることが出来なければならない。まず意味論は言語学の重要な部分であり、特に単語や表現の意味の研究で重要な役割を持っている。所が意味論の研究方法や成果を利用するに当ってはその過大評価と濫用をいましめ、かかる逸脱の実例をマールの言語学に見出している。即ち、(1)、マールは思惟を言語から切離し、(2)、人間の交通が言語以外のものによって、思惟そのものの助けによっても可能であるとし、(3)、その結果観念論に陥った、と指摘している。⁽³⁴⁾そして、思

惟が、言語によらずに人間の頭脳の中に発生し、言語という素材、言語という外被なしに発生するという見解をしりぞけて思惟は常に言語という素材にもとづき、言語の持つ語や句や文法に依存してはじめて発生するという。マールは意味論の過大評価によって観念論に陥らざるを得なかったとする。

ここでまず注意しなければならないことは、認識課程||思惟と言語の関係という課題が提出されて、それを受けて意味論が登場するわけであるが、この場合、意味論は思惟法則と言語学理論の二重の規定を受けているということである。だからありていにいってここで現代ブルジョア記号論の理論の大枠すら十分に紹介されず、しかもその思想性が完全に検討されていないのである。意味論||記号論の一面が、即ち、マールにかかる誤解を起さしめた局面がとり出されて批判されているに過ぎない。したがって現在のブルジョア諸科学の中で占める意味論の位置を測定した上での批判でないという点でレーニン程の包括性を持たない。が少くとも、このような形にしろ、ブルジョア記号論の相対的な有効性の承認ということとは更めて注目しなければなるまい。

スターリンのこの論文は、言語学という限定された領域ではあるが、彼の死後に起る『雪どけ』の前提となったという意味である種 of 思想史的な意味を持っている。また旧来の言語学に思想的な批判を加え、社会現象としての言語現象の基本原理を修正し、更にブルジョア記号論の有効性を評価した

という意味で現在のマルクス主義記号論のある部分の前駆的役割を果たしたといえよう。

このようにして、マルクス主義記号論は現在の時点に連結して行く。以上見て来た所からも明白なように「記号論」はマルクス主義全体系の中では従来さほど大きな位置を占めていない。第一には、記号論に基づく現在のブルジョア科学方法論に対する方法論としての評価が低く、当面の主要な斗争の相手と考えなかったということである。このことを逆にいえば、そこに見出し得るマルクス主義的方法論にとって有効なもの、導入という点であり積極的になかったということになる。後にのべるようにこの点に関する反省から出発したのが現在のマルクス主義記号論なのである。この問題に関連して、第二には、「記号」の持つ基本的な論理構造の分析がない。ために交通過程に於ける言語を取扱う場合にも、すぐれて認識論的な視点からの思惟活動と言語との関係と、手段としての言語の理論に分極化され、一応は両極に現われる言語の因果関係が解明されているが、いずれも原理的な考察に止り、現代ブルジョア記号論に見られる精緻な分析に迄は至っていない。このことは方法論としての記号論の批判を弱くものにしてゐる。以上のことを反省した結果として「記号」「言語」現象の持つ総体的な論理を究明し、原則的にブルジョア記号論の導入をはかり、尚、先にあげた「記号論」の

二つの課題を総合した視点からの正当な意味での「記号論」の構築こそが現代マルクス主義記号論の課題とならねばならない。

〔Ⅵ〕 現代マルクス主義記号論の思想的背景。——現代のマルクス主義記号論は後に述べるように、前述の記号論的な思想の遺産と結合されることになるのだが、かかる記号論的な方向を強調したものを、マルクス主義の記号論の遺産からは直接には導出出来ない。本来マルクス主義は、一定の有効性と真理性を持つてはいても自らとは異った思想体系、学問領域の成果に対しては、思想というものを最も厳格に考えるためにある意味で不寛容であるのだが、まさに社会主義体制の発展の中から必然的に記号論が提出されざるを得ないという形をとったことは大変不幸なことであつたといわねばならない。がしかしその思想的伝統から全く独立して記号論が成立したとも又いえないのであるが、記号論の出現の経緯には、マルクス主義なる思想体系の自己内在的な論理から必然的に導出されたのだと性急に断定しえない要素が含まれている。少くともソ連に於ける最近の記号論の出現には二つの要因があるように思われる。第一は、オートメーションを主体とする社会主義体制の生産力の飛躍的な強化という要請及びその実施から必然的に帰結している技術の論理学の問題である。第二には、かかる社会的・経済的・体制的な要請を背景

にした、所謂スターリン批判に始まる社会的な『雪どけ』の一環をなす『学問の雪どけ』の問題である。

以下この二点に立入ってみよう。機械に表示されている技術の性格は、人間の肉体的諸能力の延長であり、人間の肉体の持つ基本な作動原理を応用したという特徴を持っている。勿論部分的には高度の神経過程の一部の原理を機械化するという技術がないわけではなかったがそれはあく迄も部分的、例外的であつた。技術とは客観的な真理の意識的な適用であるとして、この段階での真理の範囲は、人間にとって外在的な客観的真理と、人間の肉体の能力という原理であつてこれを越えるものではなかった。したがってかかる技術体系に対して、人間は高度の神経過程という能力を持ったものとして主体的であり得たわけである。機械自体の持つ技術の高度化及び、機械体系の持つ合理的な編成化¹¹技術化は常に人間の神経過程の限界という限界性を持たねばならなかった。この限界性は資本主義体制の下ではより多くの利潤の獲得という動機に触発された生産能力の増大にとつて一つの隘路となつた。社会主義体制の下では、生産力の発展自体がこの限界性をこえる動機となつた。限界の打破に於いて如何なる動機があろうと、それがあく迄も技術の問題である限り体制の相違に関係なく同等の解決の方法が探求されるはずである。それは一言でいえば、人間の持つ全領域での能力の原理の技術化という問題として提示された。勿論、機械はあく迄も機械で

あつて人間の持つ全ての能力を技術化することは出来ない。例えば人間の持つ高度の判断能力は依然として技術化されていない。しかし現状では部分的には機械ははるかに人間の能力の及ばない機能を保持するに至っている。例えば複雑な論理計算の高速化、正確性、龐大な記憶能力とその任意的な利用という点で。そして、かかる種類の技術と、より高度化された機械体系の技術が、有効に適合されたものが所謂オートメーションの体系に外ならない。ここでは人間は、単なる神経過程の持主としてではなく、高度の判断能力を持ったものとして機械の主人公にならねばならない。

かかる事態をふまえたからこそ、ソ連共産党中央委員会は次のように云わねばならなかったのである。「共産党は、生産手段の総合的機械化とオートメーション化を、それなしには労働の生産性のより以上の増大の高度のテンポが不可能となるところの、技術の進歩の基本的手段であると見なしている。」(一九五九年)。かかる見解を前提にして「哲学の諸問題」一九五九年第八号の巻頭論文「オートメーション化と社会発展の若干の問題」は、オートメーション化の持つ社会的な意味を略述している。まずオートメーションの要請している技術を定義する。「オートメーション化という……『調整設備』や『管理技術』は、『機械設備』そのものの合目的活動と種々の生産過程の調和を確保している機能に代る」⁽³⁵⁾べきものであり、また、この「機能は、生産過程の道程につい

ての、機械と機械の結合物の働きについての、情報の入手、保存、変形、利用と関連している。⁽³⁶⁾所で、従来の技術にはなかった特定の人間能力の技術化を、情報の入手、保存、変形、利用の原理の利用という形でとらえてくれば、問題はまさに「知的能力を含めた人間の能力の形式化の問題」⁽³⁷⁾となってくる。全ての人間の思考過程を法則化・形式化するための客観的な方法を探求していたのが「数学的論理学」であって、これによって思考過程の重要な論理的構造が解明され、技術化の可能な形式性・法則性を附与された。複雑な情報の運動過程の論理的究明と、その形式化による技術化の課題には当然のこととして様々な学問分野の諸成果を導入せずには応えられなかった。したがってそこでは「多様な専門科学者——数学者・技師、哲学者、心理学者、論理学者——の積極的な創造的協力が必要であ」⁽³⁸⁾った。そしてこの論文では、かかる協力が可能であり、また現実性を持つ根拠の一つに新しい諸科学分野の關係及び、新しい科学分野の出現を指摘し、直ちにサイバネティックスの問題に迄言及する。同時に、もう一つの課題として、諸科学の総合の問題を提出する。これは当然のことながら、マルクス主義諸科学の方法論であり論理学である弁証法唯物論の課題となってくる。この二つの問題——即ち、新しい学問分野の出現と、諸科学の統一、あるいは総合の問題——は、記号論をはじめとするブルジョア諸科学の論理学の重要な課題でもあったわけである。

ここで問題になっているのは、オートメーション化に直接關係のある数学的論理学、サイバネティックス、諸科学の総合についての評価である。この三点は、現代のブルジョア記号論と対応させた場合に注意しなければならない問題性を持っている。

これらの諸点に関する評価はどうなっているか。まず、論理学の問題については、少くともオートメーション化という前提をおく限りは、ブルジョア的な形式論理学・数学的論理学・記号論理学の評価は肯定的である。即ち、ゲ・エヌ・ポヴァロフは、論文「オートメーション化と技術の進歩に奉仕する論理学」⁽³⁹⁾の中でかかる論理学から技術の論理学なるものを抽象し、その基礎には「論理計算」があるとして、これを定式化したブルの「論理代数学」を技術の論理学の前史の中で重要な位置を占めると規定する。ポヴァロフは技術の論理学を現在の形式論理学に酷似したものとして展開し、論理的モデル化、記号化の問題をも考慮に入れ、窮極的には論理学の論理学の構想をも許容する。この点ではまさに現代のブルジョア論理学の課題に近接してくる。ポヴァロフは、云う迄もなく、オートメーション化という前提から出発するわけで、かかる論理的展開は当然であるわけだが、物論、形式論理学は、論理学としての弁証法的唯物論と抵触する。この点に関しては後にふれることとして、次にサイバネティックスの評価の問題に移ろう。

一般に、サイバネティックスは、新しい技術化の問題に対応する特定の諸科学の分野の総合のための論理学として提示されている。即ち、人間の一つの活動分野である情報の運動過程を論理化することによって、新しい技術の問題が提示され、急激に巨大化した情報処理が重大な意味を持つ時代の一つの基礎科学の領域が設定された。所が、ソ連に於いてはそれを技術の領域の問題に限局化し、それが個有のものとして持つ方法論は殆ど考慮していない。つまりその成果だけが問題なのである。したがって技術の領域に於いては、(1)、機械および機械の組み合わせの制御のオートメーション化。(2)、複雑で多大の労働を要する科学的技術的計算を遂行し、種々の動力学的ならびに論理的過程および電子計算機を使ってモデル化すること⁽⁴¹⁾。以上の二点が主要な適用の範囲になる。そして、「科学的創造は、……必要な情報の収集、および、それを概括して、分析と推論に都合のよいような形にあらわすことと関連した、著しく多量な下書の仕事を自己のうちに含んでいる」⁽⁴²⁾のであって「この下書の仕事は完全に機械に負わせることが出来」機械はサイバネティックスの原理に従って正確に迅速にこの任務を遂行する。しかし、科学的創造の過程で重大な意味を持つ不明瞭な観念、推測、状況の一般的評価に関しては人間が勝っているという点を強調する。

更にサイバネティックスは、生物体に於ける制御や感覚器官のメカニズムの究明に大きな寄与をする事実が指摘されて

⁽⁴²⁾ いる。サイバネティックによる情報の運動過程の論理化は、有機体の中で行なわれている諸過程の解明に大きな貢献をしているのである。

更にこの論文では経済学政策の科学に対するサイバネティックスの意義を概括する。(1)経済的系の数学的モデル化の方法によって、経済現象の数学的な考察が可能になり、正確な量的方法の利用によって経済学は記述的な科学から実験的な科学となる。これは従来の経済学の発展に大きな価値を持っている。(2)経済現象の様々な要因をモデル化することによって経済計画上の課題をより適切に処理しうるようになる。

(3)これらの有効性を前提にして、経済的管理の領域での広範な利用が可能になる。それは集団的運動の理論として現実化している。(4)このような有性を確保するためには経済学者と数学者の新しい協力の形態が必要になってくる。⁽⁴⁴⁾ 著者はかかるサイバネティックスの有効性を窮極の所で保証するのは人間であり、人間の創造的な能力を前提にしない限り、サイバネティックスの成果の広範な適用は困難であると主張する。

以上の如く、ソ連に於けるサイバネティックス論は、それが成立した思想的乃至は社会的背景、及びその固有の論理構造を捨象して、その論理的帰結をのみ評価するという傾向を持っている。一九三〇年代以降のブルジョア諸科学の論理学、科学方法論の持つ意義についての考察は、この限りでは欠除している。ある特定の応用範囲に限局してそこでの有効

性が確かめられているにすぎない。このことは技術の論理学に關しても全く同様である。

したがってここで捨象された部分についての考察が当然要求されるわけである。筆者はその問題を一つの重大なテーマと考える。尚かつその領域をカバーするものとして記号論を考える。それは、まさにあるべき「記号論」として説明されねばならないだろう。その点に關しては稿を更めて述べる予定である。

ソヴェットに於ける「記号論」を直接に導出させた社会的・思想的要因は以上の如くであつたと考えられるが、ここで、二・三洋意しなければならぬことがある。第一は、一九五九年頃に始るといわれている学問の分野での「雪どけ」である。少くともそのために様々な成果を所有していたブルジョア諸科学が何らかの形で紹介され、しかもその部分的な採用が可能になった。それ故にこそ、ブルジョア科学の現段階で最も尖鋭な性格を持つ論理学、記号論に關する論文を公けにすることも出来るようになった。そしてこのことはスターリンの言語學に關する論文の持つ問題性ともまさに対応するのである。第二の問題は、ブルジョア記号論の基本的な構造の論理を提供したパヴロフの「信号理論」の持つ意味の評価の問題である。この「信号理論」をマルクス主義に於ける「記号論」と考えることは可能である。この点は、次の稿で再びふれることになるが、現在の「記号論」がこのパヴロフ

の「信号理論」から直接に導出されているとは必ずしもいえないことはここで留意すべことと思う。勿論、従来、この「信号理論」は、マルクス主義哲学、あるいは認識論の前提として論求されているが、現在の「記号論」の持つ問題性とは必ずしも一致していない。このことからあらためてしかるべき「記号論」の再構成が不可欠になってくる。コミュニケーション過程、言語現象、記号過程、情報の運動過程等々がすぐれて独自の意味を持つに至った特殊な二〇世紀後半の全状況を考慮した場合とくに重要となってくるであろう。

註(1) 現在、マルクス主義記号論とよばれるものはないと思う。少くとも、ブルジョア哲学・論理学・認識論・経験諸科学・自然科学に対するブルジョア記号論という關係に似たマルクス主義諸科学に対するマルクス主義記号論はない。したがって、ここでいうマルクス主義記号論という意味はあるべき記号論の構想という程度の具体性しか持っていない。現在、マルクス主義の立場からのコミュニケーション理論が要請されているという事実があると思われる。逆にいえば、現在のコミュニケーション理論がある種の理論的な不毛性におちいり、その恢復のためにもマルクス主義の学説による超克がなされねばならないという要求があると思う。そのためにも、マルクス主義の立場で記号が如何なるものとしてとらえられているかという点の確認は必要であろう。

尚以上の点に關係するわけなのだが、本稿は全体として先の拙稿「現代記号論の思想的意義」の註をなすものである。

(2) 鶴見俊輔「マルクス主義のコミュニケーション論」

思想一九五七年七月 岩波書店

(3) 同右

(4) C. Morris, "Signs, Language and Behavior" 1946 p. 217

R. Carnap, "Introduction to Semantics" 1948. p. 8

(5) この点に関しては筆者の速断があるかもしれない。コミュニケーションという領域が、従来の各種の科学分野では充分に処理しえなかった一定の領域を形成しているという事実があると判断した場合、様々なレベルの異なった問題に対して、コミュニケーション論的発想によって一定の問題性を指摘することは、たしかに可能であるし、重要であるのだが、それが直ちにコミュニケーション理論の前提となるとはいえないだろう。鶴見氏も、社会現象の様々な局面での問題性を指摘すると同時に、学問論・方法論・論理学等とコミュニケーション理論との関係を指摘するわけであるが、この分極化した二つの領域をふまえたコミュニケーション論の構想が充分に納得的になっていない。

(6) 鶴見氏によると、階級分化・階級対立の問題ですらデイス・コミュニケーションの問題としてとらえうるのである。このようにコミュニケーション概念を拡大すれば、一つの思想体系は、一つのコミュニケーション論の体系となる。勿論氏は、例えば階級の問題は、従来のコミュニケーション論では、処理出来ないとして、所謂コミュニケーション論が、マルクス主義のコミュニケーション論（と考えられるもの）を導入することによって例えば、かかる問題にも応えるであろうという指摘をして

いるわけである。

(7) 合同出版社「現代ソヴェト哲学」をみると、その第五集（一九六〇年）から「記号論」に関する論文が、集録されるようになっていた。

(8) エリ・オ・レズニコフ「認識過程における記号の役割について」現代ソヴェト哲学、第七集七二～七三頁。合同出版社一九六二年。

(9) この見方は筆者の私見にすぎない。一般にブルジョア記号論は、第一の課題に答えるものであった。これに対して、マルクス主義記号論は、第二の課題をそのテーマにしていたと思う。モリスは第一の課題をつきつめることによって、第二の課題に答えうる記号論を考えざるを得なかった。（モリス「記号・言語・行動」第七章参照）。モリスが内在的な要求から二つの課題にとり組みうる記号論に達したのに対して、マルクス主義記号論は、いわば、外在的な要因から、自己の記号論の中にブルジョア学者の一定の成果を導入したわけである。このような記号論としての成立過程の相違は、各々の記号論の特性を決定している。その辺の事情は本文でふれる。

(10) マルクス・エンゲルス遺稿・アドラツキー監修・唯物論研究会訳「ドイツ・イデオロギー」第一分冊一〇頁ナウカ社 一九四九年

(11) 右に同じ

(12) 同 六六頁

(13) 同 六七頁

(14) 同 十五頁

(15) この場合の「個人」の意味内容は、注意が必要である。私はマルクスの次の規定を少なくとも持つものと考え

える。「生産諸力は個人から切り離され、従って個人は一切の現実的生活内容を剥奪されて抽象的個人となる。然し乍ら、そのことに依って初めて、個人は個人として相互に結合し得べき状態に置かれているのである。」(「ドイツ・イデオロギー」六九頁)

(16) ドイツ・イデオロギー 二二頁

(17) 同 二〇頁

(18) マルクス・エンゲルス選集第十五卷「自然弁証法・フォイエルバッハ論」二〇二頁 大月書店刊

(19) 同 二〇三頁

(20) 同 二〇九頁

(21) レーニン「唯物論と経験批判論」佐野文夫訳 下巻五一九頁、岩波文庫。この四つの視点については、レーニンは、論究の最後に据えているが、この視点は最初から一貫されてとられているので、まずあげておく。

(22) バナール「歴史に於ける科学」IV巻参照 みすず書房

(23) 「唯物論と経験批判論」四七頁、この部分はマッハの「仕事保存の法則の歴史と根源」の中にあるとされている。

(24) 同、上巻四七〇四八頁、この部分はマッハ「歴史的・批判的に叙述せる力学の発達」。

(25) 同 中巻四六頁、アヴェナリウス「最少勢力量支出原理による世界の思惟としての哲学」。

(26) 同 四七頁 マッハ「熱学」

(27) 同 一六〇頁 ヘルムホルツ「生理光学」

(28) 同 一六一頁 ヘルムホルツ「講演及び演説集」

(29) 同 一六一一六二頁

(30) スターリン・石堂清倫訳「弁証法的唯物論と史的唯

マルクス主義記号論のためのノート

物論」国民文庫 一四〇一四四頁

(31) 同 一四四頁一四八頁。

(32) 例えばH・Rという社会的な技術が、実は文字通りの技術であつて、如何なる体制にも忠実に奉仕する理論的根拠の一つがここにあると考えてよいと思う。

(33) 同 論文 一六一頁。

(34) 同 一七九一八〇頁

(35) 現代ソヴェト一学 第五集 十五頁、一九六〇年、

合同出版社

(36) 同 十五頁

(37) 同 十七頁

(38) 同 十八頁

(39) 同書所収

(40) 前稿「ブルジョア記号論の思想史的意義」参照

(41) 現代ソヴェト哲学 第七集一〇四頁、ア・ア・リャ

プノフ、ア・イ・キトフ「技術と経済学におけるサイバ

ネティックス」一九六二年、合同出版社。

(42) 同 一〇六頁

(43) 同 一〇六頁

(44) 同 一〇七一一一頁

(45) 例えば、ロジニ・ガロディ「認識論」青木書店